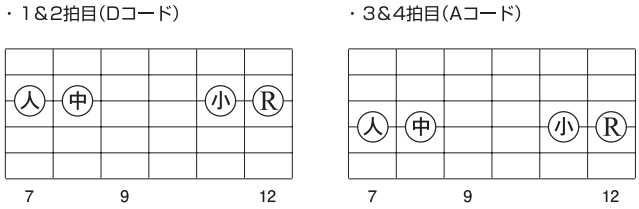
注意点1 理論

ハーモニック・マイナー風 コード・トーン・ポジション

このメイン・フレーズでは、タッピングするフレットはすべて12フレットになるので、事前に各弦における左手のポジションを覚えておくと良い。基本的にはコード・トーン・ポジションになっていて、各小節とも1&2拍目と3&4拍目が違うコードになるが、すべて異弦同ポジションになるので頭に入れやすいだろう（例えば1小節目では、使用弦は5弦と4弦になるが、フレットは両弦ともに4・7・12になる）。ただし、4小節目はやや変則的でハーモニック・マイナーのようなポジションになっている（**図1**）。ここでは、左手の3本指を使用し、さらにややストレッチ気味のフォームになるので、左手が的確にポジションを捉えられるように心掛けよう。

図1　メイン・フレーズ4小節目のポジション



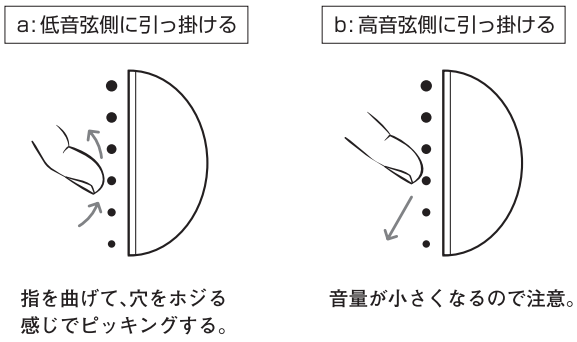
両方とも11フレット（△7th音）を鳴らすため、
ハーモニック・マイナーのようなポジションになる。

注意点2 右手

アップのような動きで 開放弦を的確に鳴らそう！

メイン・フレーズはタッピング・エクササイズだが、実は各コードのルート音である開放弦を弾くフィンガー・ピッキングの難易度も高い。1〜3小節目では、2拍ずつのタイミングで開放弦をフィンガー・ピッキングで鳴らすが、右指に余計な力が入ってしまうと、12フレットのタッピング音やハーモニクス音が鳴ってしまうので注意しよう。基本的には、指の第1関節を少し曲げてアップ・ピッキングを弾くような感覚で、弦を上側に引っ掛けると綺麗に発音できる（**図2-a**）。フィンガー・ピッキングは**ダウンでも行なえる【註】**が、発音が弱くなったり、タイミングに乗り遅れてしまうのであまりオススメできない（**図2-b**）。開放弦を的確に鳴らして、王道ライド・ハンドを攻略しよう！

図2　開放弦のフィンガー・ピッキング



～コラム25～

教官の戯れ言

著者・小林信一、かく語りき ヴァン・ヘイレン編

70年代後半に突如登場したエディ・ヴァン・ヘイレンは、ライト・ハンドや強烈なアーミング、ハーモニクスなど、当時斬新だったプレイでギター界に革命をもたらし、世界中のロック・ギタリストに多大な影響を与えた。“ブラウン・サウンド”と呼ばれるハイ・ゲインでありながらもクリーンな要素も併せ持つ彼のギター・トーンも特徴的で、これまで多くのギタリストが自ら再現しようと試行錯誤してきたのだ（しかし、エディ本人以外は出せなかったが……）。著者は、ソロ活動を一切行なわず、バンド一筋でギターを弾き続ける彼の潔い生き方をリスペクトしている。

ヴァン・ヘイレン
『1984』
「ジャンプ」「パナマ」などの代表曲を収録した6枚目。スケール感のあるサウンドとテクニカルかつ多彩なギターが凝縮した名盤。

ヴァン・ヘイレン
『F@U#C%K』
キャッチーなメロディとヘヴィなバンド・サウンドを聴かせる好盤。エディのプレイもパワフルで、圧倒的な存在感を放つ。

【ダウンでも行なえる】開放弦を弾くフィンガー・ピッキングはアップが良いが、タッピング時の右手の軌道はダウン／アップどちらでも良い。ちなみに著者は、ダウン・ピッキングの延長で下方向に指を引っ掛けることが多いのだ。